京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十三卷 第四號

昭和十六年十月

論叢

日本銀行を中核とする金融機關の組織體……經濟學博士 小島昌太郎

資本主義を越ゆるもの……經濟學博士 柴田敬

イギリス海運政策史上のアメリカ……經濟學士 佐波宣平

個人主義經濟倫理の批判……經濟學士 白杉庄一郎

ナチス經濟團體とカルテル……經濟學士 靜田均

研究

石門心學に於ける經濟思想……經濟學士 竹中靖一

經濟社會の構造分析……經濟學士 北野熊喜男

說苑

ロバアトソンの價格水準理論の批判……經濟學士 青山秀夫

陳翰笙著「產業資本と支那農民」……經濟學士 鈴木総一郎

附錄

彙報

外國雜誌論題

個人主義經濟倫理の批判

白杉庄一郎

一

個人主義經濟倫理の批判といふ標題を掲げたのであるが、實際の內容はアダム・スミスの段階に於ける個人主義經濟倫理の批判に終始するものであることを豫め斷つて置かねばならぬ。云ふまでもなく就中イギリスに於て大成された個人主義の經濟倫理は決してスミスの基礎づけによつて完成するものではなくて、その後ベンサム・ミル等を經て發展し、而もその間に色調の自ら異るものがあるのであるが、ここでは問題を專ら個人主義の經濟倫理に最初の包括的な基礎づけを與へたアダム・スミスに限つて、彼の段階に於けるそれに一應の批判的檢討を加へて置きたいと思ふ。なほアダム・スミスの段階に於けると云ふものゝ、彼の思想をその後の思想から區別する特色の如きも他日の研究問題として殘して置きたい。問題は主としてスミスの功利主義的思想にかゝはるのであるが、この思想がその後の功利主義に如何に關聯し、どの點に於て區別されるか等の問題は問はないことにしたいと思ふ。こゝのところ、私の主たる關心はスミスの如き思想に對して、我々は如何に考ふべきであるかと云ふことに向けられてゐるのである。

スミスが中世風の宗教的禁慾道德に對してあくまでも人間の立場から自愛心または利己心を是認し、自愛心もまた人間活動の極めて重要な原動力であつて幸福な人間社會を招來し得ると考へ、新興市民社會を基礎づけたの

は極めて重要な歴史的意義のある事柄であつた。のみならず、その自愛心が同時に主觀的には良心によつて更にそれが客觀化されたものとしての正義の法によつて制限されてゐる點に於て、彼の個人主義ないし自由主義は無制限の利己心の自由放任主義と區別される。しかしながら、彼が自愛心を良心と正義の法によつて制限するものの、經濟生活をどこまでも自愛心を基礎とする利益社會として把握し、そこでは他愛の原理はたゞ消極的な正義といふ形で發現するだけで、積極的な善行は必ずしも必要でないとしてゐるのは、重要な問題のあるところであらう。彼は經濟生活をたゞ自己保存といふことからのみ考へてゐるやうに思はれる。經濟生活が利己心の對象界となされたのも全くその觀點からである。しかし、個體の保存は種の保存なくしては不可能と考へなければなるまいが、個體の保存に必要な種の保存の側を個體の義務としては單に他人の幸福ないし利益を侵害しないといふことだけから考へてゐるスミスの經濟觀は、あくまでも個人主義的抽象に陷れるものと言ふのほかない。[1]

なるほどスミスは、ドイツの學者たちが屢々論難した如く、人間存在の個人的側面のみを見て、その國民的側面を見落したりなどしたのではない。否、彼はドイツの學者たちよりも卓れて國民的側面と共に人類的側面を見てゐた點さへあるのである。然しスミスの場合、國民や人類を考察する際の出發點となつてゐるのは單なる個人であつたことは否定できない。そこに彼の立場が本質的に個人主義として、特徴づけらるべき理由があるのである。[2]

個人主義の立場に於ては第一義的な主體的存在はどこまでも個人であり、社會は個人の集合體に過ぎない。個人を寄せ集めたものが社會なのであつて、社會は獨自の主體性をもたない。從つてこの立場に於ては一切の社會現象は結局は個人に還元され、人間の行爲はその主體たる個人の動機から說明される。スミスは人間行爲の根本

1) 拙稿、アダム・スミスに於ける正義の觀念、經濟論叢、第五十一卷第五號。
2) 拙稿、アダム・スミスに於ける愛國心と人類愛、同第五十三卷第一號。

動機を形成する人間性を分析し、それを利己性と利他性との統一に於て把握し、而も前者を後者よりも強力なものと考へた。從つて人間が寄り集つて構成する社會は互に利己を追求しあふ人間の集りとして利益社會たらざるを得なかつたのである。

しかも注意すべきことには、このやうなスミスの社會觀は單に經濟社會にのみ妥當するやうなものではなくて具體的現實的な人間社會一般に關するものであつた。單に人間生活の經濟的領域が利益社會的本質を有すると考へられたのではなくて、人間社會が一般にさうした構造をもち、經濟社會はさうした構造をもつ人間社會の一部面にすぎなかつたのである。卽ち彼に於ては積極的な他愛の原理が單に經濟社會のみならず社會一般の本質的紐帶となつてゐない。人間社會の他愛的原理として缺くことのできないのは正義だけであつて、善行はその裝飾にすぎない。正義とは他人の幸福を侵害しないと云ふことであつて、積極的に他人の幸福を增進するといふことを意味しない。[3] 從つて社會の本質は他人の幸福を侵害しないかぎり飽くまでも自己の幸福の追求に專念する諸個人の集りにすぎないのである。結局それは市民社會にほかならない。スミスにとつては新しく勃興しつゝある市民社會が人間社會の具體的本質的なものと見えたのである。このやうに人間社會を一般に市民社會的なものと見たことは、近世社會の成立期にその本質を洞察しその招來を念願したスミスにとつては極めて重要な歷史的意義のある事柄であつたと共に、またそれに伴ふ免れ難い歷史的運命でもあつたのである。

二

同じことは彼の人間觀についても云へる。スミスが利他性よりも強力な利己性を有するものとして把握した人間は實は近世市民社會の成立期に於ける人間であり、而も彼がそれに於て發見される人間性を普遍的なものとし

3) 前掲拙稿

て捉へてゐるところに重要な問題が伏在する。彼は人間存在の歴史性を充分に理解せず、人間性を不變なものとして前提してゐる。(註) なるほど人間性は變らない側面をもつてゐる。然し同時にそれは變つて行く側面をもたねばならぬ。それは變つて變らないもの卽ち歴史的なものでなければならぬ。スミスが摑んだ人間性は實は當時まさに勃興しつゝあつた近世市民社會に於ける——卽ち原始共同體の崩壞以來漸次利己的側面を强化してきた人間の本性とも考へらるべきものにほかならなかつた。近世初期の偉大な思想家たちは市民社會に於ける人間性を總て永遠不變なものと考へたのであるが、そこに所謂自然法の立場に基く人間觀の市民的進步性と非歴史的抽象性とがあつたのであつて、スミスの立場もその例外ではなかつたのである。

(註) スミスは哲學の對象を永遠不變の普遍者であるとし、人間性もさうしたものとして哲學研究の對象たり得るとしてゐる。「はかなく過ぎ行く性質をもつたものは決して學問ないし確固たる又は永久不變の判斷の對象 (the objects of science, or of any steady or permanent judgement) たり得ない。我々がそれらのものを考察するために注意してゐる間に、それらは變化し過ぎ去り永遠に滅んでしまふ。學問や總て悟性の確固たる判斷の對象は永久不變にして常に存在し、發生することなく腐敗することなく、何らの變化をも受けないものでなければならぬ。そのやうなものが事物の種または種的本質 (the species or specific essences) である。人間の身體の各部分は絶えず變化しつゝある、人間精神のあらゆる思想は絶えず生成流轉しつゝある、しかし人間性 (humanity, or human nature) は常に存在し常に同一であつて、決して發生せしめられず決して腐敗せしめられない。從つて人間性は學問や理性や悟性の對象であること、人間が感覺や感覺を基礎とする評價の對象であるのと同樣である。[4]」——學問が理論的なものであるかぎり、その對象が普遍者であるといふのは一應正しい。然し所謂普遍者は單に個物から抽象され、それに對立するやうな抽象的普遍にとどまつてはなるまい。それは個物に於て現實に存在し個物を包むやうな所謂具體的普遍でなければならない。從つてそれは變つて變らないものでなければならない。人間性も抽象的普遍として單に變らないものではなくて、同時に變つて行く側面をもたねばならない。

尤も、スミスも或る個所では道德の歴史性を承認し、人間性の歴史的發展を認めてゐる。卽ち彼は野蠻人と文

4) The Principles which lead and direct Philosophical Inquiries, illustrated by the History of Ancient Logics and Metaphysics, in the "Essays on Philosophical Subjects." Essays of Adam Smith, London 1869, p. 398.

明人とを比較して述べてゐる。野蠻人は絶えず危險にさらされてゐる、彼はしばしば極度の饑餓にさらされ、往往全くの缺乏から死ぬ。彼は同國人からこのやうな弱さに對する同情や寛恕を期待することができない。我々が他の人々のために感じ得る前に我々は或る程度我々自身安樂でなければならぬ。もし我々自身の不幸が我々を酷く苦めるならば、我々は隣人の不幸にかまつてゐるやうな暇をもたない。而して總ての野蠻人は彼自身の欲望や必要に專念してゐて、他人の欲望や必要に大して注意することができないのである。ところが、文明諸國民の間に於ては社會一般の安全と幸福が實現され、「仁愛を基礎とする德」が大いに啓發されると。[5] しかしながら、この場合にも野蠻人が文明化すると共に文明諸國民と同一の狀態になるであらうといふことが確信されてをり、道德の空間的相違の如きは夢想だにされてゐないと言つてよい。のみならず、文明諸國民の間に於ては仁愛の德が發達するといふものの、然しそこでもやはり利己性が利他性よりも强力なものであることには變りがなかつた。

スミスによれば、文明社會に於て我々が他の人々の中でその幸福を增進すべく配慮を要求されてゐるのは、家族・親族・隣人・友人および特別の境遇にある人々であつて、それ以外の人々との間に積極的善行を强制することはできない。我々は我々の行爲と全然無關係な他人のことについては、配慮するには及ばないと云ふのであつた。[6] これは確かに人間性の機微に觸れ、眞理の一面を道破せるものと言つてよからうと思ふ。

しかしながら、我々と無關係な他の人々とは具體的にはどういふことであらうか。市民社會の人間は見方によつては地球上の殆んど總ての人類と關係をもつてゐる。然しまた見方によつては文字通りの隣人とさへ無關係である。蓋し市民社會は人間の本源的な共同體的關係を斷ち切つて、血緣その他の特別の關係者を除いては、互に無緣の他人として獨立せしめ、彼等を結合するに利益社會的關係をもつてしたからである。それによつて、市民

5) Moral Sentiments, Part V, Chap. II.
6) 前掲拙稿

社會の段階に於て初めて、一方では各個人の自覺が飛躍的に向上し、而も他方に於てはこの自覺を未だ曾てないほどに高めた人間が廣範な國民的および更には人類的結合關係に入りこむといふ人間社會の發展史上きはめて重要な事柄が結果したのであるが、然しかくして成立した人間社會の一般的紐帶は遺憾ながら相互的他愛の共同體的關係ではなくて、相互の自愛心を利用しあふ利益社會的關係たらざるを得なかつたのである。從つて、市民社會の立場に立つかぎり、他人に對する我々の關心は一般的にはその幸福を侵害しないといふことをもつて足り、進んでその幸福を增進することは必ずしも必要でないと考へられたのである。

三

市民社會は個人主義的な社會である。そこではスミスの理解した如く第一義的な主體的存在はあくまでも個人であり、社會は個人の集合體にすぎないといふやうな面を多分にもつてゐる。原子論的社會觀がある程度の妥當性をもつ所以である。そしてそこでは人間と人間とを結びつける主たる紐帶は相互の利益關係である。それは緊密ではあるが狹隘な舊い共同體的關係から人間を解放して、その代りにより廣範な利益關係によつて人間を結合したのである。しかしながら、かくして發生した利益關係の根柢には相互的な他愛の關係が即自的に潛在し、それが利益關係の發展を媒介として益々あらはになつてくるといふ側面のあることを見落してはなるまいと思ふ。

先づ我々は、市民社會に於ても各人は少くとも或る程度に於て他人の幸福を顧慮し、それによつて自己の行爲を規制しなければならぬ。スミスは決して自愛心の無制限な發動を許容しはしなかつたのである。自愛心は正義といふ一種の他愛的原理によつて、たとへ消極的にではあるにもせよ、一定の制限を受けねばならなかつた。それが社會存立の缺くことのできない要件であつたのである。

しかしながら、利己的な市民社會に於ても利他的な原理は單に他人の幸福を侵害しないといふ意味に於ける正義の如き消極的な形で働くだけではなくて、さらに積極的な相互的他愛の關係が發生してくるといふ事實に想ひを致さねばなるまい。經濟行爲自體の中に非利己的な動機が關係をもつてくるのである。最も卑近なところから云へば、例へば經續的な取引關係は相互的な感謝の念およびそれに基く一種の他愛の關係を釀成してくるやうに思はれる。卽ち、人間が相互に、たとへ利己心からであるにもせよ、經濟的利益を與へあふ場合には、その恩惠に對して感謝し、相互に庇護しあふといふ關係が生成してくるやうに思はれる。利己心を媒介にして一種の他愛の情が生成してくるのである。いはゆる得意關係は利己的な相互關係の表現であると同時に、人間的他愛的な相互關係の表現と見らるべき側面をもちはしないであらうか。信用關係といつたものについても同樣の側面が認められるであらう。私は所謂信用經濟を貨幣經濟に對立せしめて、その底に精神的道義的な紐帶を考へようとしたブルノ・ヒルデブラントの考へ方には再評價さるべきものがあるのではないかと思ふ。

得意關係に人間的他愛的な相互關係の表現を見るといふやうな考へ方は前資本主義的ないし小市民的だと云はれるでもあらう。事實すでにスミスも、「通例最も下劣な小賣商人こそは主として自分の得意先とのみ取引するものである。大商人は、この種の些細な利益に目をくれず、彼の貨物をそれが最も安く且つ最善なる所で購入するのである。」と言つてゐる。[7] これは英國人らしい考へ方だとも云へよう。然しこれは同時に取引關係を自由競爭の方向に理想化して考へたものにほかならない。取引關係は常に不斷の自由競爭的流動狀態に於てあるものではなくて、一面に於て絕えず固定化する傾向をもつ。從つて典型的な資本主義的大規模經營に於ても得意關係が生成してくる。そして得意關係のあるところ、そこには人間的な關係の生成し得る餘地があるであらう。

7) Wealth of Nations, ed. by E. Cannan, Vol. I. p. 457.

利己的なものから利他的なものが出てくるといふのは、單に日本人ないし東洋人に特有のどちらかと云へば前資本主義的な意識を根柢とすると云つたものではなくて、もつと普遍的な人間性に基づいてゐるのではないかと思はれる。このことに關聯して興味ふかく想起されるのは、スミスが感謝の念について述べてゐるところである。卽ち、苦痛および快樂の原因は、それが何であらうと、またそれが如何にはたらかうと、總ての動物に於て直接に感謝と憤激といふ二つの激情を惹起する對象であるやうに思はれる。我々にとつて屢々または大なる快樂の原因であつた無生物に對して我々は一種の感謝を感ずる。我々が長く住んできた家や我々が長くその新綠や樹蔭を樂んできた樹は、このやうな恩人に當然拂ふべきだと思はれる一種の尊敬を以て眺められる。家が壞れたり樹が朽ちたりすれば、それによつて我々は何らの損失をも蒙りはしないにしても、我々は一種の憂鬱を感ずる。また同樣にその主人に著しく役立つた動物はその感謝の對象となるといふ事實もある。[8] このやうにスミスは人間が自分に快樂や效用を與へた人間以外の物に對してさへ感謝の念を懷くといふ事實を指摘してゐるが、そしてそれは我々が我々の日常生活を反省する場合容易に認められる事實であるが、この事實は相手が動植物や無生物である場合にのみ限られるものではなくて、相手が人間である場合にも認められるであらう。感謝はたゞ非利己的な所謂善行に對してのみ成立するものではなくて、利己心を動機とする相互的助力に對しても成立する。卽ち、たとへ利己心からにもせよ、人間が相互に經濟的利益を與へあふ場合には、その恩惠に對して感謝し相互に庇護しあふといふ關係が生成してくる、その限りに於て利己心を媒介にして一種の他愛の情が生成してくるといふことは、我々の體驗が敎へる事實であるやうに思はれる。そしてこの事實は、相手が非人格的な物である場合に體驗される事實と同樣に、普遍的な人間性を基礎としてゐるやうに考へられるのである。

8) Moral Sentiments, Part II, Chap. I.

勿論、利己心を媒介にして起つてくる感謝の念や他愛の情は、利己心の媒介の故に極めて制限されたものであり、浮動的なものである。殊に所謂經濟人の現實的存在樣式とも見らるべき會社組織の企業の如きものが考へられる場合には、經濟行爲のこの具體的人間的な側面は、極めて稀薄にして無力なものであることは云ふまでもない。然し會社も結局は人間によつて運營されるものであり、そこに會社の行爲の中に人間的な要素の入り得る餘地がなければならぬ。その限りに於てこゝでも、感謝に基く他愛心が同時に經濟行爲を媒介する側面がなければ利己の追求そのものが不完全になるやうな側面のあることが看過され得ないであらう。經濟行爲が人間の行爲である限り、如何にそれが利己心を本源的な動機とする場合といへども、その裏面にある利他心が利己活動を媒介するといふ側面をもつのである。その限りに於て、他愛の情が利己心と並んで經濟行爲の動機となり、これを基礎づけると云へよう。

右の如く市民社會に於ても利己的な人間關係から利他的な人間關係が生成し、前者を後者が基礎づけるといふ側面がある。經濟生活の所謂社會化の事實の一面は人間生活に於ける利己心の支配の擴大なのであるが、然しその反面はそれに應じて人間の他愛的結合關係が擴大して行く、少くともその可能性が增大して行くといふことである。ところで、この自愛と他愛・利己と利他との關係が大規模にして恒久的な形で統一されるのは國家に於てである。然し私はこの點については別の論文でかなり詳しく取扱つた積りである。[9] 私はそれを前提しつゝ、スミスの思想に對する私の見解を纏めて置きたいと思ふ。

四

スミスは經濟生活を利益社會として把握し、そこに於ける他愛の原理としては他人の利益を侵害しないといふ

9) 前掲拙稿、アダム・スミスに於ける愛國心と人類愛。

消極的な意味に於ける正義を要求してゐるだけで、積極的な利他的原理を否定した。然し利益社會の根柢には他愛的共同社會が存在し、利益社會の發展と共に益々それがあらはになつてくる。我々はこの愛を紐帶とする共同社會を權力的共同社會から區別して共同體と呼ぶ。而して國民的範圍に於ける共同體の具體的存在形態は國家である。國家の本質は世界的ないし人類的性格をもつた國民共同體である。

我々は人間の本來的な在り方は共同體的であり、人間社會の根本的な發展の理法は、共同社會から利益社會へではなくて、共同社會から利益社會を經て再び共同社會へであると考へる。人類の歷史は無自覺的な原始共同體から或は權力的な共同社會あるひは利己的な利益社會を通過して再び共同體へ、しかも國民的ならびに世界的規模に於ける自覺的共同體へ進み行くもの、また行かしむべきものと考へる。

理神論の立場に立つスミスにとつては、人間社會の根本理法は行爲者としての人間の自覺を超絶した事柄であつた。神はそれを實現するために人間に諸々の本能を賦與した。人間は本能を追求することによつて神の目的を實現しはするが、然し人間が實現するところは彼の意識を超えた事柄であつた。かくしてスミスの立場は眞に自覺的實踐的でなかつた。然し人間は人間存在の根本理法を自覺し、それを自己の目的として行爲するのでなければならぬ。

經濟生活に於て、人間の本來的な在り方は共同體的であり、人間社會は共同體から共同體へ發展して行くといふ人間存在の根本理法を自覺し、その實現に向つて實踐躬行すること、それが所謂新經濟倫理の根本でなければならぬ。經濟生活は單に私慾の對象界として利己心が經濟行爲の本來的動機であるのではなく、そこでは利他心は精々他人の利益を侵害しないといふ消極的な形ではたらくにすぎないのではない。經濟行爲の本質を私的利益

の追求に還元するスミスは、既に述べた如く、經濟行爲を本質的には自己保存から考へてゐるのである。然し總じて個體の保存は種の保存なくしては不可能である。個と種の保存が自覺的に統一され、兩者が全うされるところに、人間の人間たる所以があるのでなければならない。個體保存と種族保存とが共に無自覺的本能に放任されるならば、それは動物の生活と撰ぶところはない。スミスに於ては個體保存と共に考慮さるべき種族保存の側は僅かに他人の幸福を侵害しないといふことだけであつて、種の保存を全體的に配慮するのは神の仕事であつた。從つて自己の保存と發展のためにする經濟行爲は原則として他人の利益を侵害しないかぎりに於ける利己の追求といふことを以てその動機とすることが是認されたのである。しかしながら、種の保存なくして個の保存は不可能であり、全體の福祉を離れて個人の幸福はあり得ないといふことが自覺され、その自覺に基づいて經濟行爲が單に私的利益の追求としてゞはなく、自己の利益と他人の利益とを含めた全體の福祉を增進するための活動として營まれるのでなければならぬ。自己の幸福が含まれてゐる全體の福祉に對する關心、それが經濟行爲の動機となるのでなければならぬ。このことは、決して單なる當爲ではなくて、一部分すでに現實の經濟生活の理法である。所謂經濟生活の社會化の事實はこのことを物語つてゐるのである。

スミスの當時は社會全體の福祉に對する積極的關心によつてゞはなくて、利己的な動機によつて經濟生活を推し進めることが歷史的に必要な段階であつたのみならず、まだ經濟活動の社會的聯繫が不充分で超個人的全體的な動機が現實となるまでに發展してゐなかつたのである。封建時代の何と云つても封鎖的孤立的な經濟生活から市民社會の經濟生活に入るに及んで初めて經濟生活の有機的な互助連環の關係が生れてきたのである。然しその孤立的なものが社會的に組織され初めた當初の段階に於ては、その相互の有機的關係は各人の經濟行爲の本質に

まで喰ひ入つて行かなかつた。そこに、スミスが經濟行爲の本質的動機を利己心に見た根本の理由があるのである。當時はまだやつと經濟生活が外形的に國民的ならびに世界的範圍に擴大したばかりであつて、その主たる紐帶は交換であり、正義の法の擔當者たる國家權力がそれを規制してゐるに過ぎないかの如くに見えたのである。然しその當時に於てさへ必ずしもそれが事物の本質であると云へないことについては既に述べた。特に今日に於ては單なる利己心は經濟行爲の本質的動機でなくなつて行きつゝある。社會的聯繫の進展と共に、全體の福祉に對する積極的配慮が經濟行爲自體の內部へ浸透して行きつゝあると見ることができる。市民社會の發展によつて經濟生活の國民的統一が內包化し、經濟生活の中に共同體的原理が、愈々强制され益々浸透しつゝあるからである。

かくして正義の法を犯さゞる限り各人は賢明に私的利益を追求することによつて知らず識らず社會全體の福祉の增進に貢獻するといふ個人主義的經濟倫理は、各人は各々その職分に應じて全體のために奉仕し、全體の福祉が卽ちその部分である各人の幸福を增進するといふ共同體的經濟倫理によつて取代はられねばならぬ。こゝでは各人は單に公益と私益とが對立する場合に公益を私益に優先せしめるといふのではなくて、初めから私益を減して公益に奉ずるのである。公益優先といふことが單に公益と私益とが對立する場合に公益を第一義とすると云ふのであるならば、それは決して個人主義の經濟倫理を超えたものではない。公益優先といふことが新しい意味をもつためには、公益すなはち個人の利益を超えつゝ而もそれを含んだ全體の利益が經濟活動の原動力となるといふことでなければならない。眞實の意味に於ける滅私奉公すなはち私益を滅却して公益に奉仕するといふことでなければならない。但しこの場合の全體とか公とか云ふのはどこまでもその中に個または私を包攝したものであ

つて、單に個や私に對立するやうなものであつてはなるまい。從つて私益を滅却して公益に奉仕するといふことによつて全體の福祉と同時に各個人の幸福が達成されるといふことになるのでなければならない。こゝでは個人の幸福と全體の福祉との關係はスミスに於けるとは云はゞ逆の關係になる。スミスに於ては各人の幸福の追求が自ら全體の福祉に貢獻するといふのであつた。然しこんどは各人の全體のためにする奉仕が自ら各人の幸福を增進する所以となるのである。然しこれは譬喩以外の何物でもない。公益ないし全體の福祉はスミスに於ては個人の利益の總計にほかならなかつたが、こゝに云ふ公益は個人の利益を含みながら而もそれを超えた全體の福祉である。のみならず、各人の全體のためにする奉仕が自ら各人の幸福を增進すると云ふものゝ、それは決してスミスの場合に於ける如く無自覺的といふ意味ではない。個人が全體に奉仕すると同時に、全體は個人を生かすべく努力しなければならない。自らと云ふは、あくまでも個體を生かさうとする全體の側からの努力を豫想しての謂である。

從つて、全體のためにする各人の奉仕が各人の幸福を增進するためには、全體が個體を生かし、個體が全體に奉仕するやうな組織體の確立が是非とも必要となる。さうでなければ、全體のためにする各人の奉仕が必ずしも各人の幸福を增進することゝはならないであらう。蓋し全體への奉仕が或る特定部分のために利用されることがあり得るからである。それは恰も各人の私的利益の追求が全體の福祉に貢獻することを必然化する客觀的な保證が存在しなかつたのと同樣である。それ故スミスの立場に於ても、少くとも各人が他人の利益を侵害せず正義の法を犯さないといふことの規定が必要であつたのである。然しこの場合に於ては、他人の幸福を侵害しないといふ意味では何處までも正義の法に合致する利己活動にしてなほ公益に合致せざるものがあり得るのであつて、その

故にこそ個人主義經濟組織は行詰り、それに代る新しい經濟體制の確立が必要となつてきたのである。新經濟體制は、個人の全體に對する奉仕が、否それこそが同時に個人そのものが自己を眞實に生かすことのできる道であるといふことを客觀的に保證するやうな側面をもたねばならぬ。そこでは、全體への奉仕が卽ち各人の幸福の增進であり得るために、單なる部分が全體と僭稱することなく、眞實の全體が全體として組織され確立されねばならぬ。各個人は眞に全體のために奉仕し、全體は眞に各個人を生かすやうな組織體、それが共同體にほかならないのである。

私益を滅却して公益に奉ずることが本來利己的な人間に如何にして可能であるかと問はれるでもあらう。然し人間性を不變なものとし、利己心を定まつた大きさのものと考へることの誤りについては既に述べた。人間性は社會制度に相卽する側面をもつのである。それにしても、自己を愛するといふことは恐らく人間が人間であるかぎり恐らく永遠に變らぬ人間性の一側面であらう。しかしながら、この意味に於ける人間の自愛心は決して營利心などと必然的な結びつきを有するものではなくて、各人の生活の向上ないし改善をその核心とする。スミスの場合に於ても自愛心の本質は人間の生活狀態の改善に對する欲求に見られてゐると言つてよい。ところで、共同體に於ては各人の生活の向上はたゞ全體の福祉を增進することによつてのみ可能である。從つてそこでは自愛心は全體の福祉に對する關心によつて媒介されるし又されざるを得ないことになるであらう。少くともその限り、共同體に於ては自愛心は他愛心と矛盾せざるものとなり、却つて創意の基礎として生かされてくる側面をもつであらう。そのためには、さきに述べた如く、全體が眞に個體を生かすやうな體制の確立されることが缺くべからざる要件である。而して全體が個體を生かすといふことは、全體の福祉の增進によつて各人の幸福が增進される

のみならず、同時に各人をして各々その職分に應じて全體の福祉を增進するために全能力を發揮せしめるといふことでなければならぬ。各人が全體の必要のためにそれ〴〵能力に應じて働き、そのために各人の創意を遺憾なく發揮せしめるやうな經濟組織體、それが共同體經濟にほかならないのである。

共同體經濟が確立される場合には、自愛心は他愛心と矛盾せざる創意の基礎として生かされるのみならず、さらにそれはスミスの考へる如く「名譽にして高尚なもの偉大・尊嚴および我々自身の品性の卓絕に對する愛好」にまで昇華されるであらう。それはもはや所謂他愛心に對立するやうなものではなくて、自愛心と他愛心とを共に超えたもの、所謂良心そのものにほかならない。共同體に於てはこの偏狹な自愛心の抑制者が活々とした力となつてくるであらう。そこに於てこそ我々は我々自身の最大の利益をもより大きな全體の利益のために放擲することができるのである。かくして、利己の犧牲と全體の福祉への獻身とを單に所謂有德者のみに限定し、常人の經濟生活はこれを利己活動による全體の福祉の無自覺的實現に放任するといふ個人主義體制に於ける經濟と道德との分裂は止揚されて、經濟生活に關與する總ての人々が眞に自覺的道德的となり、その意味で經濟生活が道德性を回復することになるであらう。